

紀元前 5 千年紀、イラン南西部の時期区分をめぐって

—タル・イ・ギャブ遺跡の再検討—

三木 健裕

A Chronology of Southwest Iran during the 5th Millennium BC:
a Re-analysis of Pottery from Tall-i Gap

Takehiro MIKI

紀元前 5 千年紀のイラン南西部、特にマルヴ・ダシュト平原地域にみられる時期はバクーン期と名付けられ、3つの標識遺跡から出土する土器を基に3時期に区分されてきた。しかしバクーン中期の標識遺跡であるタル・イ・ギャブ遺跡の編年上の位置づけに関して見解の一致がみられていない。本稿では未だ問題が残る編年という基礎的研究を取り上げる。具体的にはタル・イ・ギャブ遺跡 1-17 層出土土器片を対象にセリエーション分析を行い、新たな編年の指標を探すとともに放射性炭素年代のデータを提供する。その結果を用いて周辺遺跡のデータと比較することで、タル・イ・ギャブ遺跡には3時期全てが連続的に見られることを示し、新しい時期区分を提示する。

キーワード：タル・イ・ギャブ遺跡、イラン南西部、バクーン期、土器編年、放射性炭素年代

A cultural period from Marv Dasht Plain region, southwest Iran, has been named Bakun and classified into three sub-periods based on the pottery assemblages from three type-sites. However, there is a chronological problem at Tall-i Gap, a type-site of Middle Bakun. In order to solve this problem, this paper clarifies the chronological markers of the Bakun Period through analysis of the potsherds from Tall-i Gap and compares them with radiocarbon dates from related sites. Analysis of the Tall-i Gap data and other sites indicates that there are three sub-periods at Tall-i Gap, therefore a new chronology of Bakun period is proposed.

Key-words: Tall-i Gap, southwestern Iran, Bakun period, ceramic chronology, ¹⁴C radiocarbon dates

1. はじめに

イラン南西部の前 5 千年紀

前 5 千年紀は西アジアにおいて社会が複雑化していく、都市誕生の黎明期といえるウバイド文化期の後半に当たり、都市化を研究する上で重要な時期である。この時期にはウバイド文化に特徴的な精製彩文土器がメソポタミアの周辺地域に拡散していく現象が見られ (Carter and Philip 2010; Stein 2010)、イラン南西部、ザグロス山脈南麓地域ではスシアナ (Susiana) 地方から精製彩文土器の伝統が拡散してきたと解釈されてきた (Weeks et al. 2010: 263)。前 5 千年紀のイラン南西部、特にマルヴ・ダシュト平原 (図 1) では、特徴的な精製彩文土器が最初に出土した標識遺跡にちなんでバクーン (Bakun) 文化期が設定されている。本稿ではバクーン期土器編年の時期区分に関して標識遺跡であるタル・イ・ギャブ (Tall-i Gap) 遺跡

(以下ギャブ) を中心に論じる。

研究抄史：バクーン期編年の研究史

1950 年代にファールス (Fars) 地方で小規模な試掘を行ったファンデン・ベルヘ (Vanden Berghe) は、バクーン期に関して3つの標識遺跡から出土した土器をそのまま前・中・後期の3つの文化期に割り当てるという、単純で文化史¹⁾的な時期区分を設定した (Vanden Berghe 1952, 1954)。すなわちタル・イ・バクーン B (Tall-e Bakun B) 遺跡 (以下バクーン B) II 層を前期に、ギャブ遺跡を中期に、タル・イ・バクーン A 遺跡 (以下バクーン A) を後期に割り当てるという時期区分案である。当時は3つの細分時期が連続的に認められる遺跡が発掘されておらず、便宜的な時期区分として提唱された。だが現在でもバクーン前期・中期・後期が連続的に認められる遺跡が存

在するかどうかは不明である。そのため最初に発掘された遺跡が編年を大きく左右しているというのがバクーン期編年研究の現状である²⁾。そのような問題を孕みながらバクーン期の3時期区分はその後の研究によって議論されて

きた (Dyson 1965; Dittman 1984, 86; Voigt and Dyson 1992; Alizadeh 2006)。

この3時期の特徴をこの地域の研究の第一人者であるアリザーデ (Alizadeh) の見解に従って簡単に説明すると以下ようになる (Alizadeh 2006)。バクーン前期の標識遺跡であるバクーン B 遺跡 II 層では、バクーン期に先行する前6千年紀後半のシャムサバード (Shamsabad) 期に特徴的な、多量に植物質混和材の混和された厚手粗製土器の割合が精製彩文土器とともに高いことが特徴である (Alizadeh 2006: 40)。精製彩文土器の特徴として単純な幾何学文の深鉢形土器、浅鉢形土器が挙げられる (図4)。アリザーデによればバクーン前期はおよそ前5200-4800年という年代に比定される。アリザーデはバクーン前期と中期の間には類似した文様が少なく、バクーン前期の文様はフゼスタン (Khuzestan) 地方のスシアナ中期のものに類似していると指摘する (Alizadeh 2006: 11, 12, 40)。

バクーン中期の標識遺跡であるギャブ遺跡では、出土する土器のほとんどが精製彩文土器となる。バクーン中期は前期よりも具象的な文様表現が増加していくと共に、文様のヴァリエーションが増加する (図4)。アリザーデはバクーン中期におよそ前4800から4500年という年代を与えている。彼はまたギャブ遺跡出土土器の多くが後述するバ

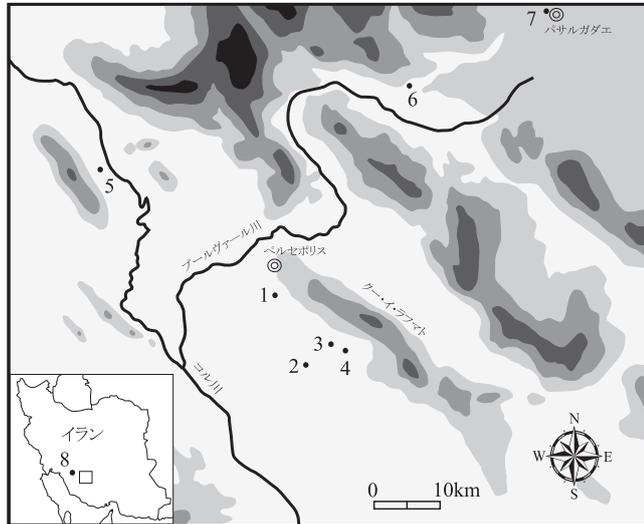


図1 イラン南西部、マルヴ・ダシュト平原の地図と遺跡
1: タル・イ・バクーン A, B, 2: タル・イ・ギャブ, 3: タル・イ・ムシュキ, 4: タル・イ・ジャリ A, B, 5: トレ・バシ, 6: ラハマタバード, 7: タル・イ・ノホデイ, 8: トレ・スラーバード

遺跡	層位	江上・曾野(1962)	時期	Alizadeh (2006)	Voigt and Dyson (1992)
Tall-e Bakun A	IV(1*)		バクーン後期	Tall-e Bakun A (ファールス後期**)	Tall-e Bakun A
	III(2*)				
	II(3*)	Ic			
	I(4*)	Ib			
Tall-i Gap	1	Ic	バクーン中期	Tall-i Gap (ファールス中期2**)	Tall-i Gap Level 12b-10
	2				
	3				
	4				
	5a				
	5b				
	6	Ib			
	7				
	8	IIa			
	9				
	10				
	11				
	12a	?			
	12b				
13	Ib				
14a					
14b	Ia				
15					
16					
17					
Tall-e Bakun B	BII BI		バクーン前期	Tall-e Bakun BII (ファールス中期1**)	Tall-e Bakun BII
			シャムサバード期	Tall-e Bakun BI	Tall-e Bakun BI

図2 各遺跡の層位と各研究者のバクーン期に関する時期区分
*中央発掘区の層位を表している。**アリザーデが提唱する時期名称である。

クーン A 遺跡の最初期段階と並行関係にあるようにみえるが、両者の間で共通する文様が僅かなため、ギャブ遺跡とバクーン A 遺跡の間に時間差がありうると述べている (Alizadeh 2006: 12, 47)。また彼はバクーン中期をフゼスタン地方のスシアナ後期 (Late Susiana 1) に並行するとみている (Alizadeh 1992)。

バクーン後期の標識遺跡であるバクーン A 遺跡から出土した土器の特徴としては、イランの土器装飾の中でも最も精巧な彩文装飾が施される点が挙げられる (図 4)。器壁を非常に薄く仕上げた尖底円錐形土器や両面に彩文が施された土器等、実用的な利用が想定し難い土器が多数見られる (Alizadeh 2006: 69)。

以上、主に文様を中心に 3 時期を記述した場合、アリザーデが指摘するように、バクーン期の 3 時期は標識遺跡を基準としており、各 3 時期の出土土器の組成は互いに異なると評価されてきた (図 2)。しかしこの編年観に対しては異なる見解を示す研究者も存在する。ヴォイトとダイソンは、ギャブ遺跡はバクーン A、B 遺跡と居住期間が一部併行し、バクーン前期や後期にも重なりと解釈している (Voigt and Dyson 1992) (図 2)³⁾。アリザーデとヴォイトらの解釈ではギャブ遺跡の居住期間のどこまでをバクーン中期の土器アセンブリッジの特徴と判断するかに関して違いがみられるということになる。一方曾野はギャブ遺跡か

ら出土した土器片の文様に着目してギャブ遺跡の時期を細分したが (図 2)、ギャブ遺跡をバクーン期内のある時点に位置づけようとは試みなかった (江上・曾野 1962)。

バクーン期のセトルメントパターン研究と編年

この土器編年に対する解釈の違いは編年だけの問題ではなく、編年に基づいてバクーン期のセトルメントパターン等社会経済的側面を研究する上でも大きな影響を及ぼす。その一例としてサムナー (Sumner) の研究が挙げられる。サムナーはマルヴ・ダシュト平原のコル (Kur) 川流域を踏査し、前 7 千年紀から 3 千年紀までの各時期の遺跡数と遺跡分布を調べ上げた (Sumner 1972, 1994)。特にバクーン期に該当する 175 遺跡に関しては独自の基準で前期、中期、後期に細分し、各時期の遺跡数を導き出してセトルメントパターンを論じている⁴⁾。

後にアリザーデはサムナーが採集した資料の内の 36 遺跡から得られた資料を、先述のアリザーデ自身の編年観に従って時期を同定し、集落の変遷を論じた (Alizadeh 2006: 49)。サムナーとアリザーデの両者の解釈を比較すると、サムナーがバクーン後期に集落数が減少したと捉える一方で (Sumner 1994: table 3)、アリザーデはその時期に集落数が漸増していたと捉えており、集落数の通時的変化の解釈の違いが見られる (Weeks et al. 2010: 249)。集

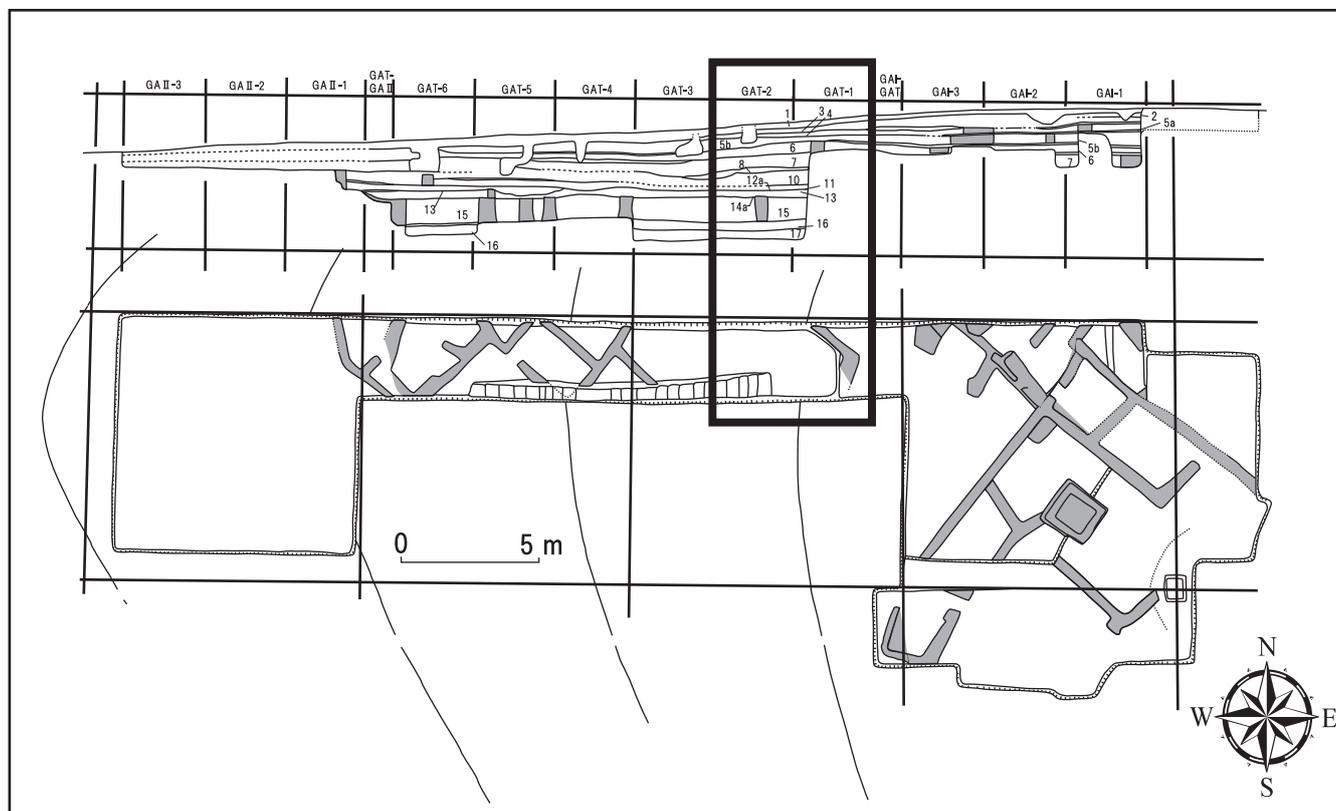


図 3 タル・イ・ギャブ遺跡発掘区断面図 (上) と平面図 (下)

落数から人口、社会の規模、そしてそこから社会の複雑化に向けた動きを読み取ろうとする場合、同時期に併存したと考えられる集落の存在と数を明確に押さえることは重要である。その点で各遺跡の時期を認定する「考古学者のものさし」となる編年の問題を解決する必要があるのである。

セトルメントパターン研究の他にこの地域では出土遺物や遺構から社会の複雑化を検証しようという試み (Alizadeh 1988; Fraser 2008; 久米 2001) 等当時の社会に目を向けた研究が多くなされているが、一方で編年という基礎研究は問題を残したまま立ち遅れているのが現状である。

よって本論文の目的はギャブ遺跡におけるバクーン中期の位置づけに関して共通の見解が未だ存在しない、バクーン期編年の問題を解決することである。以下では、ギャブ遺跡出土土器片を対象に、文様以外にも編年の指標を見つけて問題解決の糸口をつかみ、改めて他遺跡と比較してバクーン中期の範囲と土器組成を明確にするとともに、各時期の年代幅も明らかにしていく。

2. 分析：タル・イ・ギャブ遺跡 GAT-1、2 区出土土器の再整理と新たな編年の指標の抽出

タル・イ・ギャブ遺跡

ギャブ遺跡はザグロス山脈南部コル川流域に存在するテルであり、高さ約 5 m、直径約 120 m のほぼ円形のプランをなしている。1959 年 4 月から 6 月にかけて東京大学イラク・イラン遺跡調査団の江上波夫、曾野寿彦によって発掘が行われ、遺跡中央部に発掘区が設けられた (江上・曾野 1962)。深掘りがなされた GAT 区では全部で 1-17 層までの 20 層の堆積を確認することができており、そのうち本稿ではテルの頂上部に近く、発掘区の中で最も長期間の堆積が確認できる GAT-1 区と GAT-2 区を対象とする (図 3)。

今回の分析対象であるギャブ遺跡から出土した土器片は現在東京大学総合研究博物館に大部分が収蔵されている。今回分析の対象とした土器は総数 2796 点であり、その内訳は口縁部 484 点、胴部 1768 点、底部 171 点である。この他破片が小さすぎて分類不能であった土器片が 373 点見

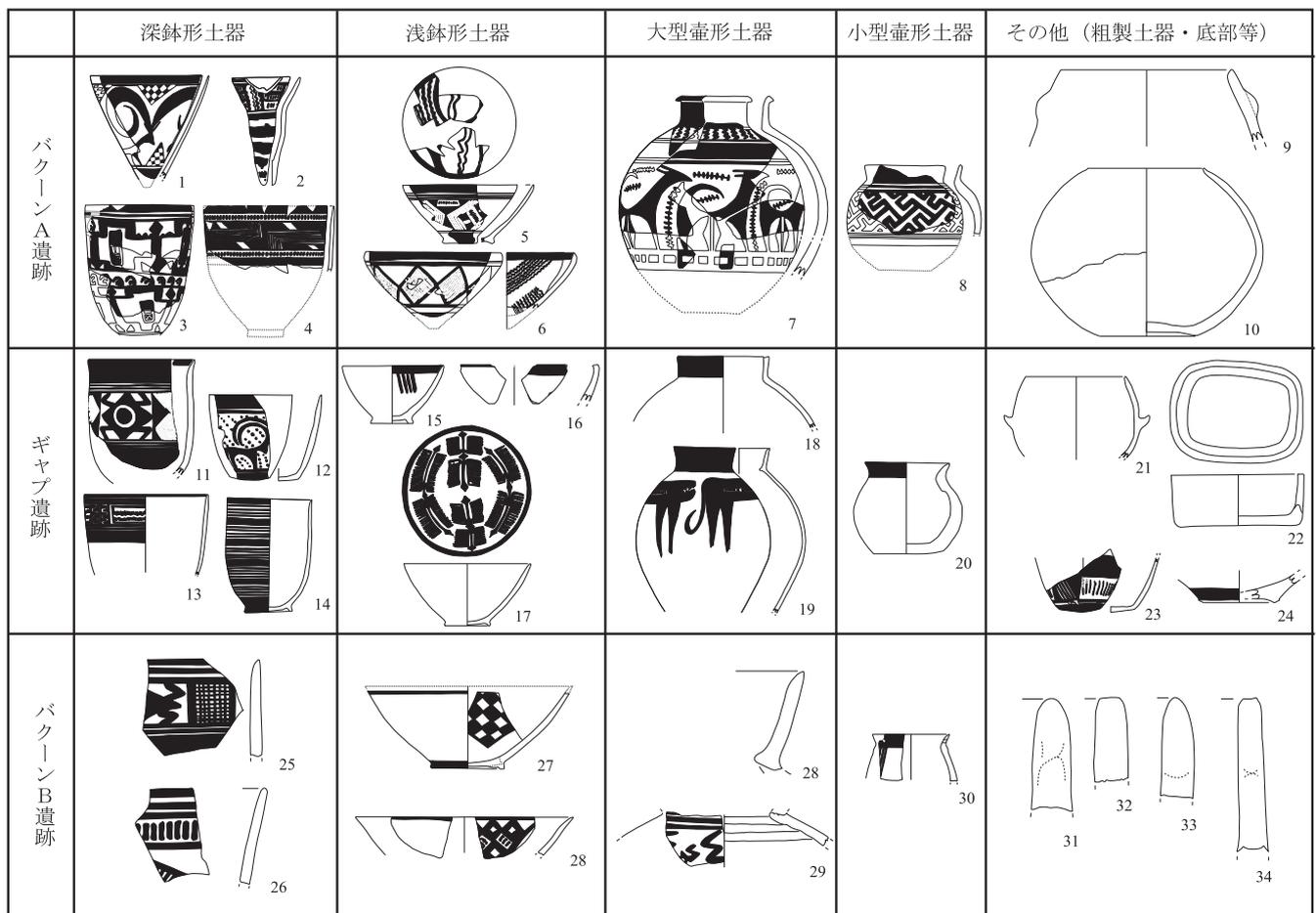


図 4 バクーン期標識遺跡の土器組成 (縮尺不同)

1-2、4-10 : Alizadeh 2006 Fig. 25-D、24-H、35-E、36-C、24-C、39-F、42-A、54-H、53-C をトレース、3 : Langsdorf and McCown 1942 Pl. 67-13 をトレース、11-15、17-22 : 江上・曾野 1962 Fig. 12-6、17-8、23-1、12-1、26-1、31-4、11-7、25-2、17-5、11-3、11-6 をトレース、16、23、24 : 筆者実測、25-34 : 江上・増田 1962 Fig. 15-5、14-2、17-3、5、13-4、5、14-17、19-1、2、6、8 をトレース

られ、今回の分析では取り除いた。

ウェア⁵⁾・形態の分類とセリエーション分析

本稿ではギャブ遺跡の編年の指標を導く方法としてセリエーション分析、すなわち 1 から 17 層までの各層での各属性が出現する頻度を定量的に調べ、通時的な消長関係を探る作業を行う。この手法は土器の文様に関しては既に用いられているが、形態、ウェアに関しては用いられていない(江上・曾野 1962)。そのため今回はウェア、形態という各属性を対象としてセリエーション分析を行った。はじめに分析のため、分析対象となる土器片をウェアという観点から大きく以下の 5 種類に分類した。

鈍黄色黒彩土器

バクーン期で最も一般的な精製彩文土器。表面は淡黄色(5Y8/3)、彩文顔料は黒色(5Y2/1)を呈することが多い。大型鉢形土器と壺形土器の場合、細砂粒のほか方解石粒が混和材として含まれており、胎土がやや粗い。小型鉢形土器や小型壺形土器の場合には、非常に緻密な黄褐色の粘土が胎土として使われていて、視認できる混和材は確認されていない⁶⁾。この土器は土器焼成窯⁷⁾を用いて非常に高温で焼成されたと考えられる。ロクロでは成形されず、輪積み又は巻き上げ法で製作されている。特に彩文が施される面はナデを用いて念入りに平滑にされている。土器の下部、内部などの目立たない場所ではケズリでやや粗く調整が施される場合もある。その後でスリップをかける例もみられ、スリップには胎土と同色の液体状粘土が用いられる。

鈍黄色赤彩土器

上記と同様の胎土、混和材、成形法、器面調整、スリップを有するが、彩文顔料の色は褐色(10YR4/4)、暗赤褐色(5YR3/2)、極暗赤褐色(7.5YR2/3)が含まれる赤色系となっている。

精製無文土器

上記の鈍黄色黒彩土器と同様の胎土、成形、器面調整、焼成であるが、スリップや文様が施されていない土器。鈍黄色黒彩土器の無文部分との区別が困難であるが、深鉢形が多く、口縁部に彩文が施されていない点が特徴的である。薄手磨研粗製土器(図 4 : 9, 10, 21)

精製土器に比べて厚い器壁を有しており、芯や胎土が黒色(7.5YR1.7/1)を呈するが、器面は赤褐色(5YR4/6)や鈍い赤褐色(5YR4/3)を呈する。小-中程度大の砂粒や方解石粒、そしてササが混和材として用いられる。板重ねか輪積みで成形した後、胎土の表面に粘土の上塗りを施

している。赤色のウォッシュ又は粘土の上塗りが内外両面において施され、器面はやや滑らかではあるが、全体的に調整が粗い。磨研が施されることも一つの特徴であるが部分的である。締まりが弱く、低温で焼成されている。形態に関しては無頸で内彎したものが多く、胴部に一對の把手が貼付される点が特徴的である。薄手磨研粗製土器は調理、煮沸用としての機能が想定される。

厚手粗製土器(図 4 : 22, 31-34)

薄手磨研粗製土器に比べてさらに厚い器壁を有している。器面は鈍い橙色(7.5YR7/4)、鈍い黄橙色(10YR6/3)を呈し、芯も器面と同様の色を呈する。多量のササのみが混和材に用いられている。板状又は紐状の粘土を積んで成形されたと思われるが、その後同種類の粘土を上塗りした事例もみられる。器面はナデで平滑にされる。締まりは非常に弱く、先の薄手磨研粗製土器と同様低温で焼成されている。器壁が直立した盆状の形態が器形に見られる。

その他に形態という観点に着目して、特に鈍黄色黒彩・赤彩土器の形態に関しても、土器片という分析対象の制約はあるが土器片から確認できる範囲で今回新たに分類を行った(図 4)⁸⁾。

小型壺形土器

口縁部と胴部の間にくびれがあり頸部をなしているが、胎土が緻密で、口径も 10 cm を超えない。出土数が非常に少ない。

深鉢形土器

外側の器面に彩文が描かれることがほとんどであり、胴部から口縁部にかけておおよそ垂直に近い立ち上がりを見せる。供献、什器など様々な使用が想定される。

浅鉢形土器

内側の器面に彩文が描かれることが多いが、稀に両面に彩文が施される場合もある。深鉢形土器同様供献、什器など様々な用途が想定される。今回口縁部を器壁の傾きを基準に外傾型(傾きが 50 度以上)と鋭角外傾型(傾きが 50 度未満)(図 4 : 27, 28)に細分した。さらに外傾型については丸口縁型(図 4 : 15, 17)と四角口縁型(図 4 : 16)に細分した。

大型壺形土器

口縁部と胴部の間がくびれて頸部をなした形態であり、胎土や器面調整はやや粗く、口径が 10 cm を超える。貯蔵用に用いられたと想定される。浅鉢形土器と同様口縁部

の傾きを基準に外傾型 (図4:19, 28)、直立型 (図4:18) に細分した。

底部形態

底部形態に関しては丸底、平底、高台に大まかに分けられる。今回は高台に着目し、形態と製作技術の違いを基準に、底部に粘土紐を貼付けた上で調整を施した平坦型 (図4:15) と爪先立ち型 (図4:17)、平底を窪ませて整形した薄型 (図4:24) に細分した。

セリエーション分析の結果と編年の指標の抽出 (図5)

セリエーション分析の結果、いずれの層でも80%以上が鈍黄色黒彩土器であるが、ウェアの口縁部片では精製無文土器は17層だけ、厚手粗製土器は10層より下層、薄手磨研粗製土器は10層より上層に見られることがわかった (図5:1)。このように特定のウェアが特定の層に限定的にみられるという、特徴的な消長関係が見られた。胴部片も同様の傾向を示している (図5:2)。浅鉢形土器片の口縁部の各細分型式の消長を見ていくと、全体的に外傾型の丸口縁型のものが主体を占めるが、17層においてのみ鋭角外傾型が急に出現し、主体を占めるようになる状況が見

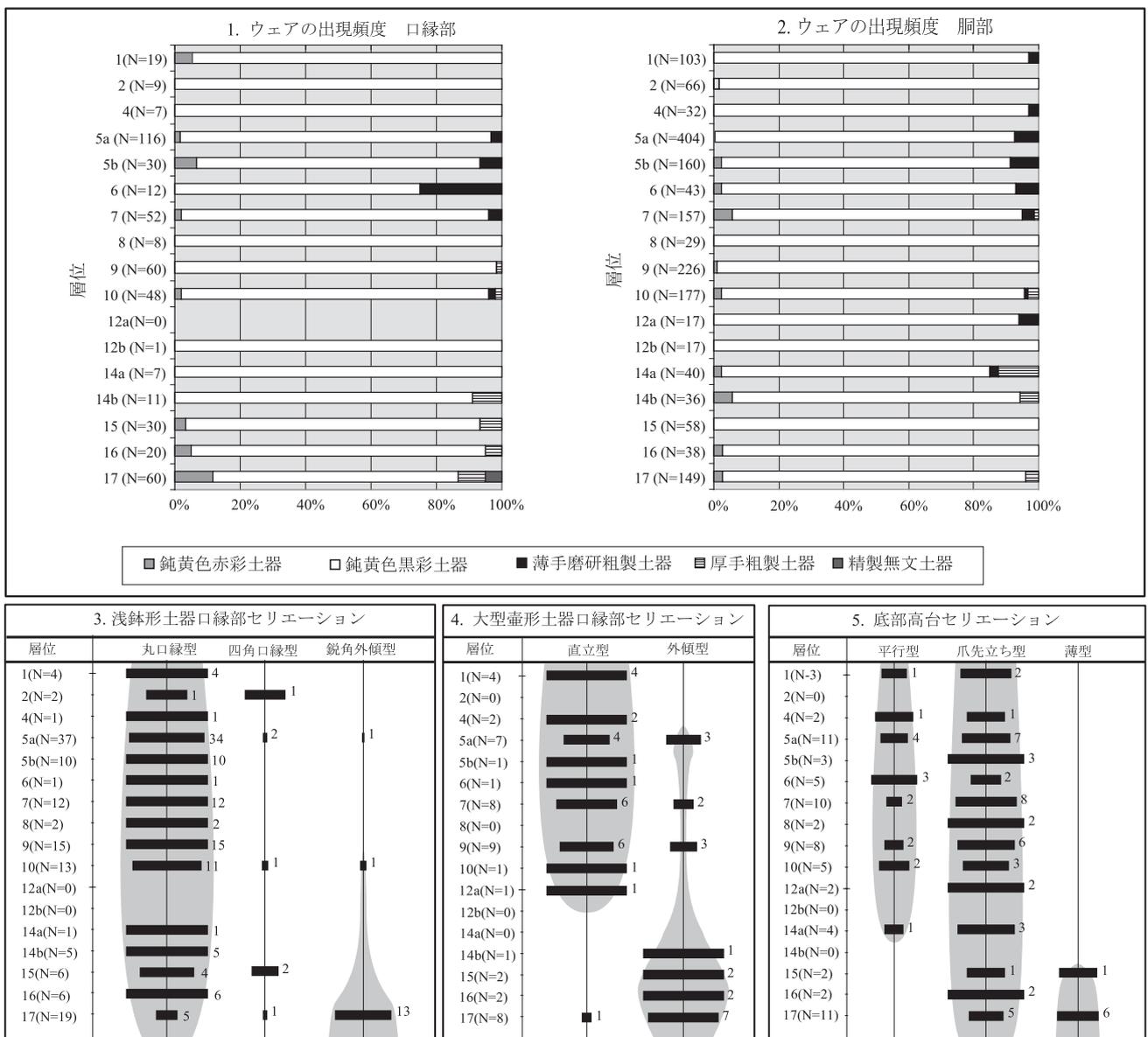


図5 各属性の1から17層における出現頻度の変化

1: ウェア口縁部、2: ウェア胴部、3: 浅鉢形土器口縁部、4: 大型壺形土器口縁部、5: 底部高台

て取れる (図5:3)。大型壺形土器口縁部の各細分型式の消長をみると、下層では外傾型がほとんどであるが、12b層を境に直立型が主体を占めるようになる様子が見取れる (図5:4)。その一方で上層においても以前からの外傾型はわずかに存続している。

底部形態の各細分型式の消長をみていくと、高台の形態に関して17層から15層までは爪先立ち型の高台と薄型の高台が主体的であるが、14a層から以降は薄型がほとんど見られなくなり、平坦型の高台が登場し、爪先立ち型と共存していくようになる (図5:6)。

以上の分析結果のまとめとして、これらの変化から編年の指標を見つける作業を行う。図5の分析結果を見ると、特に薄手磨研粗製土器、厚手粗製土器、精製無文土器、浅鉢形土器の鋭角外傾型、大型壺形土器の外傾型と直立型、底部形態の薄型には出現頻度においてある特徴的な傾向が見られる。それはある層で出現し、一時主体を占めるが、時間の経過とともに消滅するという傾向であり、この傾向は編年の指標になるといえる。言い換えれば、これらの属性の存続期間はある時間からある時間までにその出現が限られるということである。よってギャップ遺跡で編年の指標となることが確認された土器片が別の遺跡から出土すれば、ギャップ遺跡の特定の時期とその遺跡の同時代性を主張する一つの手掛かりとなると考えられる⁹⁾。

以上の編年の指標をまとめたのが図6である。図6において各編年の指標の始点、終点に着目すると、10から12層付近に各編年の指標の始点と終点が多く認められ、また16、17層付近でも終点が多く見られることから、これら2つの層位は変化の境目と考えられる。よってギャップ遺跡には少なくとも17-16層 (ギャップ下層)、15-10層 (ギャップ中層)、9-1層 (ギャップ上層) という3つの時期を措定できる¹⁰⁾。

ここでアリザーデ、ヴォイトらの両者ともにバクーン中期と判断したギャップ中層出土土器の組成を具体的に述べておく。深鉢形土器は口縁部付近に上から黒色帯と細い線、そして彩文帯を描くことを特徴とし、彩文帯は胴部上半に配置されることが指摘されている (図3:13) (江上・曾野 1962)。彩文帯には幾何学文や様式化された動物しか描かれない傾向がある。浅鉢形土器は内面には波線、曲線を中心とした文様が施される傾向がある。壺形土器に関しては、口縁部から頸部を塗り潰すか、胴部全体に大胆に大きな写実的な動物を描く傾向がある (図3:19)。粗製土器に関しては厚手粗製土器が多数を占めている。以上の組成はバクーン中期に典型的に認められる特徴であり、ギャップ遺跡15-10層はバクーン中期に比定されうる。特に厚手粗製土器というバクーン前期の特徴が見られることから、バクーン中期の前半に位置づけられる。

それではギャップ遺跡上層、下層はバクーン中期に該当するのか、それともバクーン前期、バクーン後期に該当するのだろうか。この点を明らかにするために、ギャップ遺跡上層、下層の時期の土器組成を具体的に見ていく。

10層より上層では、深鉢形土器に関しては10層以前と異なり、彩文帯は胴部全体に配置されていくことが指摘されている (図3:12) (江上・曾野 1962)。一方で今回の再整理の結果、両面に文様が描かれた土器が5b層以降から確認されており、これはバクーンA遺跡に認められる事例 (図3:5,6) に類似している。従って10層より上層、特に5b層以降は15から10層におけるバクーン中期に典型的な文様の配置とわずかに異なる傾向を示している。粗製土器に関しては薄手磨研粗製土器のみが見られる。

反対に15層より下層では、それ以降の層とは異なり、鋭角外傾型の浅鉢形土器の内面に幾何学文を好んで描くという傾向が見られることが今回の再整理で明らかとなった。粗製土器に関しては厚手粗製土器のみしか見られない。

放射性炭素年代測定

今回50年前の土壌サンプルから得られた炭化物2点の

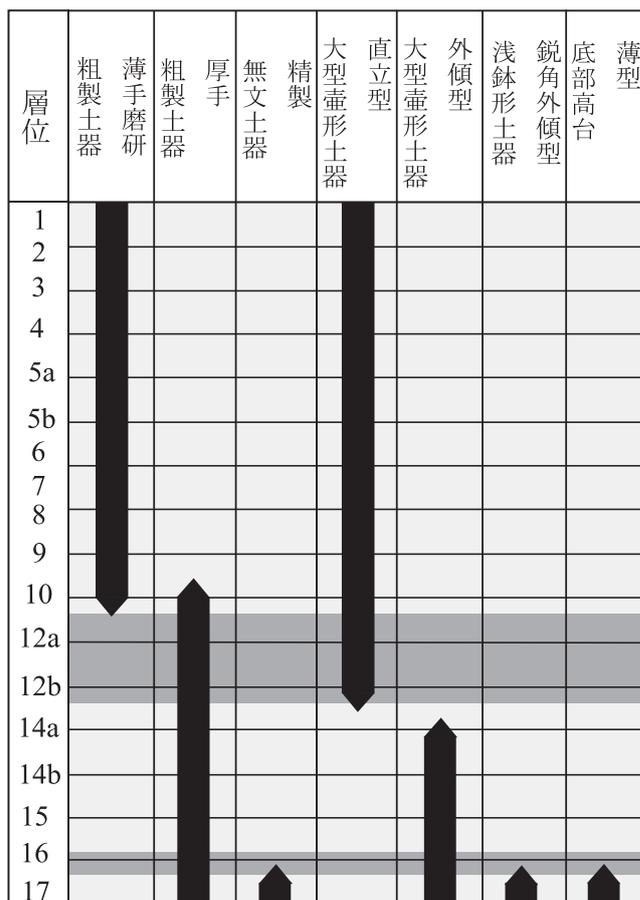


図6 タル・イ・ギャップ遺跡の編年の指標となるウェア・形態の諸属性の時間幅 (2本の灰色帯は変化の境目を表す)

放射性炭素年代測定も行った。株式会社加速器分析研究所白河分析センターにて、ギャブ遺跡 GAI-8 区の 5b 層から採集された土壌サンプル、GAT-1 区の 17 層から採集された灰サンプルから得られた炭化物 2 点を AMS 法で測定した。その結果前者 (IAAA-110030) からは 4555-4451 cal. BC (2 σ)、後者 (IAAA-110031) からは 4728-4583 cal. BC (2 σ) という年代が得られた。

3. 考察：タル・イ・ギャブ遺跡の編年の位置づけ

前節ではギャブ遺跡出土土器片の分析を基に新たな編年の指標を抽出することができ、バクーン中期の土器の特徴を明確にすることもできた。本節では考察として、前節で明らかにした編年の指標という相対的な比較材料¹¹⁾と、放射性炭素年代という理化学的な比較材料を用いて、ギャブ遺跡をバクーン期に編年的に位置付ける。それによってギャブ遺跡の上層、下層がどの細分時期に該当するかを確認し、またギャブ遺跡上層・中層・下層の年代幅を探っていく。

今回タル・イ・ギャブ遺跡との比較の対象とする遺跡はバクーン期の標識遺跡であるバクーン A 遺跡 (後期)、B 遺跡 (前期) の各発掘地点、そして同じフェールス地方のママサニ (Mamasani) 平原にあり、バクーン期の堆積が連続的に認められるトレ・ヌラーバード (Tol-e Nurabad) 遺跡である。

編年の指標を用いて比較するにあたり、今回の分析結果だけでは比較の材料に乏しい。そのため、セリエーション分析を用いてギャブ遺跡出土土器片の文様に関する編年の指標を明らかにした曾野の先行研究も利用した (江上・曾野 1962 : 表 1, 14)。この研究によって多くの文様には出現頻度の時間的変化があまり見られないことがわかったが、数種類のみ編年の指標となる文様もある¹²⁾。もう一つの比較材料である放射性炭素年代を用いる上で、年代の較正にあたっては OxCal (Ver 4. 2. 1) のプログラムを使用した。OxCal ではさらにベイズの定理を利用し、試料情報を用いた年代解析を行った。すなわち考察対象となる各遺跡出土試料が得られた層位をデータの制約に利用して、較正年代の高正確化を試みた (Bronk Ramsey 2009; Reimer et al. 2009) (図 7)¹³⁾。

タル・イ・バクーン A 遺跡

バクーン A 遺跡はクー・イ・ラフマトの麓に位置し、ギャブ遺跡に程近い位置に立地するテルで、南北約 150 m、東西約 120 m、高さは約 4 m である。この遺跡はバクーン後期の標識遺跡であり、ギャブ遺跡より年代が下ると考えられてきた (Alizadeh 2006)。バクーン A 遺跡には遺跡北側の調査区 (Langsdorff and McCown 1942)、

中央調査区 (Alizadeh 2006)、日本隊のトレンチ (江上・増田 1962) など多数の発掘区域が存在しており、発掘区間の関係を事前に十分検討しておく必要がある。バクーン A 遺跡では北側の調査区、中央調査区、そして日本隊のトレンチの順に標高が低くなっており、標高の高い調査区ほど堆積が新しい可能性が想定される。

バクーン A 遺跡の最も標高が高い区域、すなわち北側調査区の IV 層、III 層などからは、前節で設定したバクーン中期には見られない、非常に精彩で複雑な文様を持った土器が多く見られる (図 4 : 1, 3, 5, 6, 7)。その中でギャブ遺跡上層にかかる編年の指標としては薄手磨研粗製土器、直立型の大型壺形土器が見られる。文様に関してはギャブ遺跡との間に類似性が見られない。反対にバクーン A 遺跡の最深部にまで達した北側調査区 I 層、中央調査区 4 層、そして日本隊発掘区では、文様の点でバクーン後期に典型的な特徴があまり見られなくなり、バクーン中期の特徴に類似してくる。ギャブ遺跡上層にかかる編年の指標としては薄手磨研粗製土器、直立型の大型壺形土器が見られるほか、ギャブ遺跡 3 層に多くみられる階段状文様 (江上・曾野 1962 : 表 1、文様 Id) (図 4 : 4) も認められる。

ギャブ遺跡の 5b 層の放射性炭素年代の結果 (IAAA-110030) とバクーン A 遺跡から得られた放射性炭素年代 (Beta-207562, Beta-210983, AA63491) を比較すると、両者がかなり近接することがわかる (図 7)。これらを鑑みてバクーン A 遺跡とギャブ遺跡を比較した結果をまとめると、ギャブ遺跡上層はバクーン中期後半から後期初頭に該当すると考えられる。

タル・イ・バクーン B 遺跡

バクーン B 遺跡はバクーン A 遺跡に隣接し、ほぼ円形で、直径約 140 m、高さはバクーン A 遺跡より高く約 4.5 m のテルである。このテルはラングスドルフとマッカウン¹⁴⁾ (Alizadeh 2006) と日本隊 (江上・増田 1962) によって調査がなされている。大きく 2 つの層が認められ、バクーン前期の標識となるバクーン B II 期 (日本隊では I 層にあたる) とシャムサバード期にあたるバクーン B I 期が存在する (Alizadeh 2006)。

バクーン前期に相当する日本隊 I 層では、厚手粗製土器が多く見られる中で、単純な幾何学文が描かれた深鉢形土器が多く見受けられる (図 4 : 25, 26)。ギャブ遺跡下層にかかる編年の指標としては厚手粗製土器、外傾型の大型壺形土器、鋭角外傾型の浅鉢形土器が認められた。特に鋭角外傾型の浅鉢形土器にはギャブ遺跡最下層と同様に内面に幾何学文がみられる (図 4 : 27, 28)。バクーン B 遺跡には A 遺跡とは対照的な特徴として、文様も含めてギャブ遺跡出土土器との間に共通性が多く見られることが挙げられ

OxCal v4.2.1 Bronk Ramsey (2013); r:5 Atmospheric data from Reimer et al (2009);

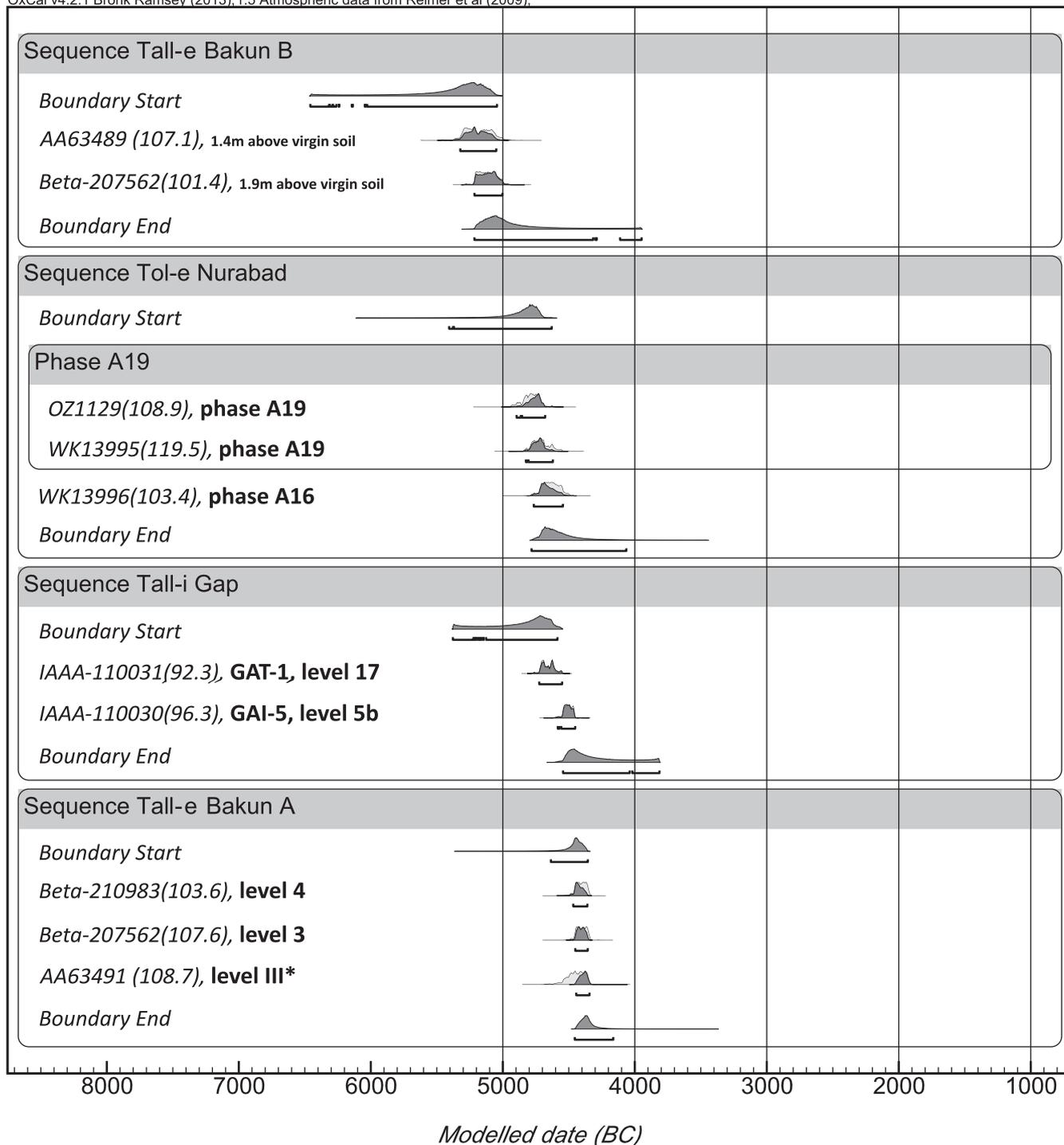


図7 マルヴ・ダシュト平原各遺跡から得られた放射性炭素年代測定値

(測定番号、適合指標 [カッコ内の数値]、層位情報の順に表記)

(Alizadeh 2006, Potts and Roustaei 2006 のデータの一部を参照。*level III は level 3 とは異なる層である)

る。よって文様・器形・ウェアの点ではギャブ遺跡下層はバクーン前期に併行する可能性が高い。

バクーン B 遺跡から得られた 2 つの層の放射性炭素年代 (Beta-210985, AA63489) とギャブ遺跡 17 層の放射性炭素年代の結果 (IAAA-110031) を比較すると、両者の

間には少し時間差が存在することがわかる (図 7)。編年の指標と放射性炭素年代とで違った結果が得られているが、バクーン B 遺跡の放射性炭素年代に関しては問題がある可能性もある¹⁵⁾。

トレ・ヌラーバード遺跡

トレ・ヌラーバード遺跡はマルヴ・ダシュト平原より100 km 西のママサニ平原に位置する遺跡である。この遺跡の面積は9 ha、高さは23 mであり、新石器時代からバクーン期、後続のラプイ (Lapui) 期まで長期間存続している遺跡である。テル北東隅の崖にトレンチ A が設定され、1 から 28 の時期が認定されている。その内の A19 期から A14 期までからバクーン期の遺物が出土しており、その堆積の厚さは4.3 m になる (Potts and Roustaei 2006)。

下層の A19 期では精製土器、厚手粗製土器の両方が存在するが、新石器時代の土器である厚手粗製土器が多数を占めることから、報告者は新石器時代の層としている (Potts and Roustaei 2006: 73)。ギャブ遺跡下層にかかる編年の指標として厚手粗製土器、精製無文土器、鋭角外傾型の浅鉢形土器が見られる (Potts and Roustaei 2006: Fig. 3. 80-81)。A19 期から得られた放射性炭素年代 (WK13995, OZ1129) と比較する限りではギャブ遺跡 17 層との間に時間差が見られるが、前 5000 年を下る値は出ていない (図 7)。このことからバクーン期の始まりは前 5200 年というアリザーデの推定とは異なり、前 5000 年を遡らない可能性が示唆される (Weeks et al. 2010: 263)。

A18 期では精製土器の出土数が多くなっており、バクーン前期と報告されている (Potts and Roustaei 2006: 73)。ギャブ遺跡下層にかかる編年の指標として厚手粗製土器、精製無文土器、鋭角外傾型の浅鉢形土器が見られるほか、ギャブ遺跡下層に多い大型壺形土器の胴部に動物を描いたものや、外傾型の大型壺形土器といった特徴が見られるようになる (Potts and Roustaei 2006: Fig. 3. 82-85)。これにより時期区分に関して曖昧であったギャブ遺跡下層が、バクーン前期であるという見解を補強できたことになる。

A17 期に到ると精製土器がほぼ主体となり、厚手粗製土器はギャブ遺跡の 17-10 層のようにわずかに見られるのみである。編年の指標としてはギャブ遺跡中-下層にかかるものがみられ、具体的には外傾型の大型壺形土器、直立型の大型壺形土器、精製無文土器が挙げられる (Potts and Roustaei 2006: Fig. 3. 86-88)。精製無文土器が依然として高い割合を占めている点がギャブ遺跡と異なる。

A16 期になると彩文、形態においてバクーン中期の特徴が強く見られるようになる。ギャブ遺跡上、中、下層にかかる編年の指標として外傾型の大型壺形土器、精製無文土器、文様においては点文 (図 4: 12) (江上・曾野 1962: 表 1、文様 1h) が見られる (Potts and Roustaei 2006: Fig. 3. 89-91)。この層から得られた炭素年代 (WK13996) も今回バクーン中期として設定したギャブ遺跡 15-10 層の推定年代の範囲に入る (図 7)。

その上層の A15 期、A14 期では土器片の出土点数が少なく (Potts and Roustaei 2006: 48)、ギャブ遺跡の編年の指標と比較できなかった。これらの時期にも A17 期以来の精製土器の無文化が続いている。A14 期からは精製土器と共にラプイ期に特有の赤色磨研土器が登場し始めており、バクーン後期の終わりに相当する時期にあたる。

以上長期間にわたる堆積が認められるトレ・ヌラーバード遺跡とギャブ遺跡の対応関係を比較すると、編年の指標や炭素年代においても、バクーン前期から中期にかけての時期である A18、A17、A16 期がギャブ遺跡と併行するという結果が得られた。またこれによりバクーン中期を含めた各時期区分の年代幅を明らかにする大きな証拠が得られた。

4. まとめにかえて

以上の検討を踏まえた結果、ギャブ遺跡はバクーン中期だけでなく前期、後期にもわずかにまたがる、すなわちマルヴ・ダシュト平原においてバクーン期の細分 3 時期が連続的にみられる遺跡であるということを確認でき、バクーン期編年の問題に関して、ヴォイトとダイソンの解釈を支持する形に近い結果となった。

それとともにバクーン期の 3 時期の土器組成を明確にし、年代幅の推定も試みる事ができた。すなわち現時点ではバクーン前期は約前 5000 から 4700 年、中期は前 4700 年から 4500 年、後期は、およそ前 4500 年から前 5000 年紀末と推定される (図 8)。またバクーン中期と前期、後期の境は今回の分析でも依然不明瞭な点があることから、バクーン中期には前期・後期の移行期的な性格もみられる可能性も示唆される。今後の課題として、この新たな編年を「考古学者のものさし」として用いてイラン南西部、マルヴ・ダシュト平原のセトルメントパターン等の通時的变化を再検討することが挙げられる。それによってバ

calBC.	時期	Bakun A 北 中央 日本陸	Gap	Bakun B 北東 中央	Nurabad A区			
4500	バクーン後期	IV 1 I	1 2 3 4 5a 5b 6 7 8 9 10 11 12 13 14a 14b 15 16 17		A14			
		III 2 II						
		II 3 III						
		I 4 IV						
	後半							
	バクーン中期							A16
	前半							A17
4700 : : : 5000	バクーン前期			I II	A18			
	シャムサバード期			II I	A19			

図 8 バクーン期各遺跡の層位関係、時期区分案

クーン期の社会経済的側面における通時的变化、すなわち社会の複雑化のプロセスをより細かく捉えることができるようになり、本稿は前5千年紀の都市黎明期の一端を探る上で大きな役割を果たすといえるだろう。

謝辞

本稿は日本西アジア考古学会第17回大会にて口頭発表した「イラン南西部、バクーン期編年の再検討—タル・イ・ギャブ遺跡出土土器の分析から—」を修正し、まとめ直したものである。本稿執筆に当たっては指導教官である西秋良宏先生には東京大学総合研究博物館所蔵のタル・イ・ギャブ遺跡出土土器という貴重な資料を扱う機会を与えて頂いただけでなく、多くの助言を賜った。また大森貴之氏には放射性炭素年代測定とその統計解析に関して有用な助言を賜った。ここに記して感謝申し上げます。

註

- 1) 文化史とは本稿では標識遺跡と個別の時期が対応すると前提して編年を組み立てる考古学的観点を意味する。バクーン期編年の従来の文化史的立場に反対する主張はペトリー (Petrie 2011) やチャヴェルディ (Chaverdi et al. 2008) にも見られる。ペトリーは「初期の調査や発掘の絶頂期において、考古学者たちは「文化」という言葉を普通に使用しており、その「文化」は少数の標識遺跡の発掘で得られた物質文化の明確な型式に基づいて定義されていた。20世紀半ばまで優勢であったこうしたアプローチによって、個別の時期に標識遺跡の名前を与え、専ら土器を重要資料と捉える文化史シークエンスが普及するようになってしまった。そしてこれは現在でも使われ続けている (Petrie 2011: 158)。」と述べて批判している。
- 2) キャンベル (Campbell) はハラフ期の編年において、このバクーン期の場合と同様の標識遺跡が孕む不可避的な問題を取り上げて詳細に論じており、一つの解決策として放射性炭素年代測定の利用を挙げている。(Campbell 2007)
- 3) ヴォイトとダイソンはバクーン期を三期に細分可能ではあるが、その時期の間の境目は不明瞭であり、彼らの細分案はあくまで仮説的なものとしている (Voigt and Dyson 1992: 138)。
- 4) サムナーは自身の遺跡の時期の認定に関して、正確さに問題点があると指摘している。例えばバクーン前期をバクーン期の彩文土器とシャムサバード期の土器が共に出ていることを条件としており、許容範囲の広い曖昧な分類となっている (Sumner 1994: 49)。
- 5) ウェア (Ware) とは本稿では胎土、色調、器面調整、焼成、機能の属性に基づいて確認されたカテゴリと定義する。
- 6) アリザーデは精製彩文土器に関して胎土の粗さを基準に Standard と Fine に分類しているが (Alizadeh 2006: 67-69)、今回の分析における分類では二つを分けず一括して扱うこととする。アリザーデの分類が今回の編年指標を探ることを目的とした分析では具体的な成果を出さなかったためである。
- 7) 土器焼成窯はタル・イ・バクーン A 遺跡やラフマタバード遺跡で報告例がある (Langsdorff and McCown 1942; Alizadeh 2006; Bernbeck et al. 2006)。
- 8) 曾野が完形土器を基にギャブ遺跡出土土器の形態を25種類に区分しているが (江上・曾野 1962: Fig. 10)、今回のように土器片の分類に適用するには情報が細かすぎる。
- 9) ベルンベック (Bernbeck) はトレ・バシ (Tol-e Bashi) 遺跡から出土したバクーン期土器の文様の存続期間を論じたが、本研究

と大きく異なるのは存続期間を設定するに際して報告書中で報告された土器のみを用いており、定量的にこのような変化を論じていないことである (Bernbeck et al. 2010: Tab. 6.5)。

- 10) 境目となるような断絶は層序からも読み取ることができる。発掘報告を紐解くと11層付近に断絶が一つ見られ、15層と16層の間にも発掘者が発掘時に気がつくほどの差異が土器を中心とした遺物に認められていた (江上・曾野 1962)。
- 11) セリエーション分析ではある意味で属性を切り捨てて遺物を単純化し、時間的な変化の分析・比較を容易にするものであり、重要な属性が無視されてしまう危険性が大きいことを指摘しておく。そのため編年の指標の有無しか用いない単純な比較には欠点があることに注意しておく必要がある。
- 12) 曾野の分析の場合対象範囲が発掘区全体の土器片にわたっているため筆者の分析の条件と同じわけではない。
- 13) キャンベルのハラフ土器編年に関する論文において、ベイズ統計を用いた放射性炭素年代の処理の方法の詳細が述べられている (Campbell 2007)。
- 14) 発掘者であるラングスドルフとマッカウンは詳細な発掘報告をしておらず、アリザーデが再報告している。
- 15) この放射性炭素年代が得られたサンプルは2004年の再調査の際に得られたものであり (Alizadeh 2004; Alizadeh 2006: 120-121)、調査された年代が日本隊やマッカウン、ラングスドルフの調査の際の層位及び遺構と一致しない可能性もある。

参考文献

- Alizadeh, A. 1988 Socioeconomic Complexity in Southwestern Iran during the Fifth and Fourth Millennia B.C.: The Evidence from Tall-e Bakun A. *Iran* 26: 17-34.
- Alizadeh, A. 1992 *Prehistoric Settlement Patterns and Cultures in Susiana, Southwestern Iran. The Analysis of the F. G. L. Gremliza Survey Collection*. Technical Report, No. 24. Ann Arbor, Museum of Anthropology, University of Michigan.
- Alizadeh, A. 2004 Recent Archaeological Investigations on the Persepolis Plain. *The Oriental Institute & Notes* 183: 1-7.
- Alizadeh, A. 2006 *The Origins of State Organizations in Prehistoric Highland Fars, Southern Iran: Excavations at Tall-e Bakun*. Oriental Institute publications 128. Chicago, The Oriental Institute.
- Bernbeck, R., H. Fazeli and S. Pollock 2006 Life in a Fifth-Millennium BCE Village. Excavations at Rahmatabad, Iran. *Near Eastern Archaeology* 68(3): 94-105.
- Bernbeck, R., H. Fahimi, and N. Janmaleki 2010 The Bakun Pottery. In S. Pollock, R. Bernbeck and K. Abdi (eds.), *The 2003 Excavations at Tol-e Bashi, Iran: Social Life in a Neolithic Village*, 152-62. Archäologie in Iran und Turan 10. Mainz, Philipp von Zabern.
- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51(1): 337-360.
- Campbell, S 2007 Rethinking Halaf Chronologies. *Paléorient* 33(1): 103-36.
- Carter, R. A. and P. Graham 2010 Deconstructing the Ubaid. In R. A. Carter and P. Graham (eds.), *Beyond the Ubaid. Transformation and Integration in the Late Prehistoric Societies of the Middle East*, 1-22. Studies in Ancient Oriental Civilization Number 63, Chicago, The Oriental Institute of the University of Chicago.
- Chaverdi, A., C. A. Petrie and H. Taylor 2008 Early Villages on the Persian Gulf Littoral: Revisiting Tol-e Pir and the Galehdar Valley. *Iran* 46: 21-42.
- Dittman, R. 1984 *Eine Randebene des Zagros in der Frühzeit: Ergebnisse*

- des Behbahan-zureh Surveys*. Berliner Beiträge zum Vorderen Orient 3. Berlin, Dietrich Reimer.
- Dittman, R. 1986 *Betrachtungen zur Frühzeit des Südwest Iran. Regionale Entwicklungen vom 6. bis zum frühen 3. Vorchristlichen Jahrtausend*. Berliner Beiträge zum Vorderen Orient 4. Berlin, Dietrich Reimer.
- Dyson, H. R. 1965 Relative Chronology of Iran 6000-2000 B.C. In R. W. Ehrich (ed.), *Chronologies in Old World Archaeology*. Second edition, 215-256. Chicago, University of Chicago Press.
- Fraser, J. A. 2008 An Alternate View of Complexity at Tall-e Bakun A. *Iran* 42: 1-21.
- Langsdorff, A. and D. E. McCown 1942 *Tall-i Bakun A: Season of 1932*. Oriental Institute Publications 59. Chicago, The Oriental Institute.
- Petrie, C. A. 2011 "Culture", Innovation and Interaction across Southern Iran from the Neolithic to the Bronze Age (c. 6500-3000 BC). In B. W. Roberts and M. Vander Linden (eds.), *Investigating Archaeological Cultures: Material Culture, Variability, and Transmission*, 151-182. New York, Springer.
- Potts, D. T. and K. Roustaei 2006 *The Mamasani Archaeological Project Stage One: A report on the first two seasons of the ICAR - University of Sydney expedition to the Mamasani District, Fars Province, Iran*. Tehran, Iranian Center for Archaeological Research.
- Reimer, P. J., M. G. L. Baillie, E. Bard, A. Bayliss, J. W. Beck, P. G. Blackwell, C. Bronk Ramsey, C. E. Buck, G. S. Burr, R. L. Edwards, M. Friedrich, P. M. Grootes, T. P. Guilderson, I. Hajdas, T. J. Heaton, A. G. Hogg, K. A. Hughen, K. F. Kaiser, B. Kromer, F. G. McCormac, S. W. Manning, R. W. Reimer, D. A. Richards, J. R. Southon, S. Talamo, C. S. M. Turney, J. van der Plicht, and C. E. Weyhenmeyer 2009 IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years Cal BP. *Radiocarbon* 51(4): 111-1150.
- Stein, G. J. 2010 Local Identities and Interaction Spheres: Modelling Regional Variation In the Ubaid Horizon. In R. A. Carter and G. Philip (eds.), *Beyond the Ubaid. Transformation and Integration in the Late Prehistoric Societies of the Middle East*, 23-44. Studies in Ancient Oriental civilization Number 63, Chicago, The Oriental Institute of the University of Chicago.
- Sumner, W. M. 1972 *Cultural Development in the Kur River Basin, Iran*. Ph. D dissertation, Philadelphia, University of Pennsylvania.
- Sumner, W. M. 1994 The Evolution of Tribal Society in the Southern Zagros Mountains, Iran. In G. Stein and M. S. Rothman (eds.), *Chieftdoms and Early States in the Near East: The Organizational Dynamics of Complexity*, 47-56. Madison, Prehistory Press.
- Vanden Berghe, L. 1952 Archaeologische Opzoekingen in de Marv Dasht Vlake (Iran). *Jaarbericht Ex Orient Lux* 12: 211-20.
- Vanden Berghe, L. 1954 Archaeologische Navorsingen in de omstreken van Persepolis. *Jaarbericht Ex Orient Lux* 13: 394-408.
- Voigt, M. M., and R. H. Dyson 1992 The Chronology of Iran, ca. 8000-2000 B.C. In R. W. Ehrich (ed.), *Chronologies in Old World Archaeology*. Third edition, 122-178. Chicago, University of Chicago Press.
- Weeks, L. R., C. A. Petrie and D. T. Potts 2010 *Ubaid-Related-Related? The "Black-on-Buff" Ceramic Traditions of Highland Southwest Iran*. In R. A. Carter and G. Philip (eds.), *Beyond the Ubaid. Transformation and Integration in the Late Prehistoric Societies of the Middle East*, 245-276. Studies in Ancient Oriental Civilization Number 63, Chicago, The Oriental Institute of the University of Chicago.
- 江上波夫・増田精一 (編) 1962 『マルヴ・ダシュト タル・イ・バクーンの発掘：1956』 東京大学東洋文化研究所。
- 江上波夫・曾野寿彦 (編) 1962 『マルヴ・ダシュト タル・イ・ギャブの発掘：1959』 東京大学東洋文化研究所。
- 久米正吾 2001 「イラン、コル川流域、タル・イ・バクーン A 層の再検討：銅石器 時代村落の世帯と組織の復元に向けて」 『オリエント』 44 巻 2 号 3-27 頁。

三木 健裕

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

Takehiro MIKI

The University of Tokyo